難儀な話

川崎ゆき

一難去ってまた一難と、難は続くものだ。一難ではなく二難三難と難が多い場合、難が同時にあるため、難だらけとなる。難とは難儀なことで、解決するのに、一寸面倒なことをしないといけない。これが一寸ですめばいいが大層なことをしないと、乗りきれないこともある。

難儀なことをやっているときよりも、先に待ち受けている難を想像しているときの方が不安だろう。

運と災難は何処で起こるか分からない。分かっている難ではなく、まったく予知できない難に突然見舞われることがある。運というのは良い運もあれば、悪い運もある。だから悪いことばかりではなく、良いこともあり、これは天からの授かり物だろう。無料だ。棚からボタモチ。

この場合、棚がなければいけないが、そのためにわざわざ棚を付ける必要はない。それにボタモチが嫌いな場合、嬉しいことではない。誰も食べないのなら、捨てるしかない。そういう意味ではなく、甘い話が落ちてくるのだろう。

「最近どうですか」

「一難去ってまた一難だよ。災難は連鎖するらしい」

「常駐ものの難もありますよ」

「ほう、何ですかそれは」

「常に抱えている難です」

「常時ですか」

「常にです。だからその難のため、楽しいときでも喜べない。うっかりと喜んだりすることもありますが、常駐難のことを思い出すと笑顔も引きます。笑っている場合じゃないと」

「それは難儀ですなあ」

「年を取ると心配事が減るどころか増えます。放置していた心配事が沢山溜まっていますからね。時効になって、消えていくのもありますが」

「いいですねえ、時効は」

「しかし、後悔の念に苛まれることもありますよ。まあ、それもそのうち忘れてしまいますが、長く尾を引くのもあります。墓場までね」

「まあ、難儀なことでも、何とか解決方法が見付かり出すと気分が良くなります」

「解決できない問題は？」

「それなんです。難の中でも一番厄介なのはそれです。解決しないタイプです。それが常駐しているのに、別口の難がやってくる」

「まあ、それで普通でしょ」

「普通」

「心配事もなく気楽に暮らしている人なんていないでしょ」

「おお、そう言われると気が楽になる」

「気楽そうな人でも、言わないだけですよ」

「そうですなあ、言わないというより、言えなかったりします」

「まあ、そういうのを抱えながら暮らしていく状態は、普通でしょ」

「普通」

「人生は苦海を行くようなもの」

「ほう」

「苦しくて普通なんです」

「一難去っても、また一難ですが、去ったとき、少し気分がよろしい。一瞬ですがね」

「いい話、ありがとうございました」

「解決しましたか」

「しません」

了